愛國婦人會機關

愛國婦人

毎月十日廿五日發行

(定價)一枚參錢五厘一ヶ月分七錢三ヶ月貳拾壹錢半年分四拾貳錢壹ヶ年分八拾四錢金圓無遞送料郵券代用(壹錢又は五厘切手)一割増
廣告料五號活字一行四拾錢

發行所　東京市麹町區下二番町三十七番地大日本女學會內　愛國婦人發行所
發行兼印刷人　山澤俊夫
編輯人　手島益雄

電話番町壹千三百三十番

社説

眞正の美人

新橋停車場の待合室に掲げてある三井呉服店の額面廣告の美人を指して「此婦人には屹度肺結核がある」と云うた醫學博士があるが、實に今日は顏色の蒼白い、身躰の纖弱い、即ち呼吸器や消化器が弱くて、貧血して痩せた婦人を、普通一般に美人として居るのである。

斯樣な婦人を美人とするとは随分古いとて、平安朝以來であらう、所謂垂髪に十二單の御姫樣は、今日の婦人よりも猶一層纖弱かッたであらうと思ふ。其頃の書物に「はかなくきこしめす」などゝあッて、御姫樣の食事は極めて小量であッたものと見える。其れはその筈で、斯樣な服裝では運動ができないから、快く腹の空くとはない譯である。其故に當時の婦人は短命なのが多かッた。是は支那の文物が日本に渡來してより以來、段々其風に倣ッて斯樣な纖弱い婦人を、美人とする樣になッたのであらう。其故は本誌に掲げて居る、愛國婦人傳の中でも神功皇后・倭姫命・形名の妻などは、必ず立派な躰格であッたに違ひない。纖弱い身躰であッたならば、決して斯樣な働きはできない譯である。

奈良の正倉院に秘藏させらるゝ皇室の御物中に、樹下美人の圖の御屏風があるが、其美人はいづれも豐頰である、即ち俗に云ふおたふくである。又奈良の藥師寺の寶物中に吉祥天女の畵像がある、(當時の貴顯の御姿を模寫したのだと云ふ説もある)此吉祥天女といふのは、七福神の中の毘沙門の女で、美を綜合した神であッて、取りも直さず、美人の標本であるのだが、是れも矢張りおたふくである。此二種の繪畫は、奈良朝時代のもので、美術家の稱讃措く能はざる名畵であッて、確に當時の美人の眞相を描出したものである。斯樣な次第であるから、今日の美人觀は、中古以來の謬見であッて、女子の躰育上否日本國民の躰育上に、大弊害を及ぼすものである。日本固有の眞正の美人は、丸顏で色澤のよい、肥ッた婦人である。此間違ッた觀念を疾く改めて、美人の標本を復古せしむるとは、極めて緊要なる問題であらうと考へる。

侯爵母堂　前田朗子筆

最も大切なる學問は何ぞ

嘉悦女子寄宿舍主　嘉悦政子

現今の有樣を見まするに、一も學問二も學問と、只々學者にならう智者にならうとあせる者ばかりかと思はれますが、無論學者も智者も世の中に是非必要である事は明かでありますが、只々智惠藝能をのみ競爭いたします結果はどうなりましやうか、丁度今年の樣な雨多き年の蕣のやうに、無暗に蔓のみ長く延び葉のみ大きくなりて、大切なる根本は痩せ細りて實力がなく、随ッて立派なる花も開き得ず、十分なる實をも結び得ず、いと哀れなる結果を來たしはせぬかと思ひます。只實力のなき位に止まればまだしもよろしけれど、其害の及ぶ所は智惠才能の發達するだけ益々恐るべき結果を來たすであらうかと懸念いたします。凡そ智惠才能のみ發達したる人の擧動を觀まするに、多くは利己一方に傾き、自分だに立身出世をすればよい、人はどうでもよいと云ふ觀念が自然と深くなりまして、其結果人を陷いれ、他を蔑ろにすると云ふ、最も見にくき最も卑劣なる擧動を現はすやうであります。試みに廿七八年の役又は北清事件を見まするに、どうして我軍隊はあのやうに勇壯でありましたらうか、どうして彼のやうに清廉でありましたらう、どうして彼の文明開化の國だと自らほこる所の西洋各國の軍隊にも遙かに勝りて勇壯なる淸廉なる擧動をなしたてありましやうか、是は武器の各國兵に勝りたるが爲めでありましやうか、躰力の各國兵に勝りたるが爲めでありましやうか、才能が各國兵に勝れて居た爲めでありましやうか、この疑問は實に我日本國民たるものゝ大いに注意熟慮すべき點だと考へます、彼れ各國兵の武器の精鋭なる事は遙かに日本に勝り居りたる事て、此點に於ては我兵は正に劣りて居たに相違御座いません。智惠才能も亦決して我兵は各國兵に勝れて居なかッた事を確信いたします。此の如く果して武器に於て智識に於て又は躰力に於て、即ち智躰二ッの者に於て、我兵は各國兵に確かに劣りて居りながら、其結果は反對に我兵彼れに勝り、即ち優勝者となり、赫々たる威名を輝かす事を得たのは、抑も何に基因するでありましやうか、是れ單に軍隊としての精神的修養と、國民としての精神的涵養即ち德行の一點に於て我兵が各國兵に勝り居りたるが爲めでありましやう。廉耻心と云ふ人間修德上最も大切なる心が、比較的我兵は各國兵に勝り居りたるが爲めでありましやう、此心ありて初めて君の爲め國のため喜んで困難に當ると云ふ、所謂忠君愛國の精神が現はれるのであります。彈丸雨注の下に、身を鴻毛よりも輕くして、進むで働くと云ふ勇氣が出るのであります、それて我身を全うしやうの分捕りを多くしやうのと云ふが如き、卑劣なる破廉耻なる擧動をいたさぬのであります。而して此心たるや此行ひたるや、決して即席に得られるものでなく、多年修養に修養を積むで、後、初めて非常の場合に於て現出するものであります。凡そ罪なる者は如何なる人にても歡迎するものでなく、誰も忌み且つ恐るゝものであります、而して此の罪は耻でありまして罪人は破廉耻なる所業をなしたるものであります。然るにこの罪と耻とどちらが重いか何れが惡むべきであるかと云ふ事を考へねばなりません、罪は身にあるもので耻は心にあるものでありましやう、故に罪は外に顯はれますけれども、其一身に止まりますが、耻に至りては心にありて罪の如く容易に外に現はれませぬ。さりながら、其害は一身に止まらずして、大にしては國家に及ぶかと思はれます。假りに此處に人ありて妄りに朝政を論議し、又は擅に官吏を誹謗し、又時としては熱血の迸る所黨を組むで政府に反抗する者ありといたしまするに、此人たるや其職にあらずして斯の擧動あるは實に免し難きの罪人でありましやう。然しながら其心を察すれば、或は愛國の餘りに出てたるものありて、實に憐むべきものがあります。是に反して廉耻心なき人、即ち恥を知らぬ人の擧動はどうでありましやうか、假令ば戰地に於ての如き、始終人後に隱れて危險を避けるとか逃るとかして、只管に我身の安全をのみ計るではありませんか。又衆人環視の中に在りて、一品にても分捕を多くしやうなどゝ云ふ事にのみ心がけ、夫れがため大切なる一身の職務を忘却するではありませんか、實に其醜躰は見られたものではありません。斯の如き德行修まらざる國民が一人にても多くなればなるほど、其國は總ての事に於て害を受け、國躰は次第に弱くなり、次第に危くなる譯で御座いましやう。是はほんの一例であります、此一例此單純なる一例にても、既に廉耻心なるものは、人たるもの、腦髓に、出來得る限り十分に平素修養して置かねばならぬ必要がある事が明瞭であります。隨ッて人には寧ろ智惠才能よりも遙かに德行の大切なる事が分明であります。

(未完)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

寄書

○懷舊談（一）

海軍大尉 長、尾 耕作

又しても懷舊談てふ海軍の說話、面白くなき節を咎め給ふなかれと、前以て御斷り申上候。

敵愾心このごろ少く思ふ所あッて「黃海々戰ニ於ケル松島艦内ノ狀況」なる書を繙いた、其劈頭には水兵二名が甲板上で天を拜してをる圖があッて、其傍に「海戰ノ前夜水兵國家ノ爲メ戰捷ヲ祈ル」云々、の說明がある、之を見るの誰かは感涙を催さゞらん、予は今更の如く九年前の當時を思ひ、當時の實話を左に記述するのである。

予は其當時にはまだ少尉候補生であッて、日淸戰役の初期に軍艦干珠が解役せられしが爲橋立乘組を命ぜられたのであるが、乘組兵員の中にも干珠から轉じて行ッたものが多かッた。時日は確と記憶しないが、黃海々戰前の航海中、予は夜中常直士官の指揮下に艦橋の副直をしてをッた、夜中は三十分毎の時鐘が鳴ると、副直候補生は中下甲板を巡視し、舷窓燈火其他常體に異なッた事は無いかを見屆け、當直士官に報告するのが規定である、夫れで予は後甲板の入口から砲甲板に降り前部の方へ巡視し行いた、前部水雷室の上方は前甲板員と稱する艦内署を持つ者が、吊床を釣ッて寢る場所である、不意に「ナーニ、チャン〳〵」との聲を聞いた、其聲は兼て軍艦干珠で聞き慣れた其當時一等水兵の鮫島某である、彼が艦内部署は前甲板員である、慥かに鮫島の聲で今でも夫れを思ひ出す、彼は實に元氣な水兵で「ナーニ、チャン〳〵」の寢語は正く彼の性質を示してをるのである。

さて愈々九月十七日戰爭の當日であッた、彼の役目は豧索手と稱して、艦の漏水とか、索具折斷とか、舵具破損とか云ふ時の外用は無く、若し又敵と非常に接近した時には小銃を以て、敵を狙擊する襲擊隊に加はるが、其外に一發の大砲をも放つ事を得ない配置である、所が双方からドン〳〵打ち合ひ、小口徑の速射砲も多數の彈丸を發射し、致遠は沈沒し、多數の支那水兵は海に投じて漂流し、我艦隊が通る航跡の傍に、辮髮を搔き上げながら、手を合して助けを乞ふてをッた、今迄腕が鳴ッて堪え得なかッた元氣な水兵は、勇情を制し難く、小銃を携へて飛び來り、水面に向ッて小銃を狙ふた、艦長は令して水中の敵兵に銃丸を發射せしむるを禁じたから、實際發銃はしなかッたが、其時の事であッた、鮫島は前甲板に跳り出て、小銃を敵兵に擬し「ナーニ、チャン〳〵」と叫んだ、余は艦橋上に在ッて之を目擊し、又其語を聞き、數日以前夜中の寢語に鮫島が發聲したのと、全然同一なのを思うて如何に彼等敵愾心の盛んなるかを感心した事であッた。

講談

北京籠城の婦人

森林黑猿

佛國公使館は前號に演べましたる如き危殆の形勢に陷りましたが、人々ホテルの妻女の爲に激勵せられまして一層奮發し、死力を盡して戰ひまする所へ、各國から若干づゝの援兵を送りまして、俱に力を添へて奮戰致しましたので、遂に敵を擊ち退けて了ひました。

其後各國公使館とも、いよ〳〵危殆に陷ッて參りまするので、英國公使館内に日本婦人們の世話係りとして附添ひましたる、西本願寺の川上貞信和尙は婦人方に向ひ

「今日から愚僧は貴婦方が避難の穴を掘りまして、いよ〳〵と云ふ時は其中にお這入りになる樣に致しますから、其の思召してお在下さい」

と云はれまして、各婦人も氣の毒に思ひ

「川上さん怎麽も種々お世話さまになりまして相濟みません、爾云ふ事なら貴僧お一人にのみお骨折りを願ッては餘りお氣の毒ですから、わたくし共も出來るだけはお助手を致します、其代りお役には立ちませんよ」

と中川軍醫夫人は、籠城婦人中一番活潑だと云ふ評判のありました位ですから、避難所の直ぐ前の庭に出てまして、川上和尙の穴掘りの手傳ひまでしやうと致しましたが、是は勿々婦人の身で出來るものではありませんから、遉の中川夫人も止めてお了ひなすッたさうですが、併し一度自ら助手せんとして庭まで下りた所などは、感心なものだ、と川上和尙の話して厶います。

工學士小川量平君の夫人ふみ子も、中川軍醫夫人に劣らず何かに就て奔走して居られましたが、此の婦人の一つの感ずべき話しと云ふは、籠城の始め英國公使館に移ッて來ます時、懷中に鏡を入れて參られましたので、山本讃七郎氏が

「小川さんの令閨、貴女鏡まで持ッて被在るとは好いお心懸けで厶いますな、人間は若い中でなくては不可ません、私共の樣に老人になると、モゥ鏡などは見樣と云ふ氣になりませんからねい、何でも人は若い中〳〵、アッハ、、、」

と戲談の樣に云ッたので、元來勝氣な小川夫人勃然として

「山本さん御戲談は宜加減になすッて下さいまし、此中で幾干わたくしの樣な無神經な女でも、お化粧などをする爲に鏡などは持ッては參りませんわ、私しはいよ〳〵防ぎ切れなくて仕方のない時は、惡怯れないで死ぬる氣で厶いますが、其時髮が亂れて居たり、餘り顏などが汚れて居ますと、死で後までも、日本婦人は日頃の嗜みが惡いと云はれるであらうと思ひますから、そんな惡口を云はれぬ樣に、スワと云ふ時はお化粧をして、立派に覺悟して、笑ッて死にたいと思ひますので、此の鏡と短刀とは其爲に持ッて來たのです、決して貴君の思召す樣に、平常お化粧などをする心算で携えて來たのではありません。

と短刀と鏡とを並べたので、人々寔に感心なさいました。

白砂靑松　松浦の風光（其五）

肥前會員 田村梅能子

太閤脾睨松は虹の松原三不思議の一なり、數十步の間稚松生茂るも、滿面地上に匍匐して敢て成木せず。言ひ傳ふ、豐公征韓の役此林中に憇ひ、雜林の風雲を望見せんとするも、鬱蒼たる松樹に遮ぎられ、遠見に便ならざるを以て、「咄何物ぞ」と叱せしかば、流石の大木も枝を伏し葉を垂れて、數百年の今日に至るまで尙は成長せずと。其二は此松原に限り、蟬の鳴聲を聞かずと、之も亦豐公に叱せられ、皆啞となりしといふ。當年猿郞の武威思ふべし。其三は此廣き松原が、（長さは殆んど二里幅は七八町より十五町餘に及ぶ所あり。）何時も能く掃除の行屆きをる事なり。之は里人が常に彼の高砂の尉が携へし如き、松葉かきにて、落松葉をかき集め、薪に代用するを以て、砂上に掃目正しき箒痕を印し、丁寧に塵芥を拂ひし如き觀をなせり。斯く明白に書き述ては、不思議でも何でもない事である。松原を以て、世に名高きは、舞子の濱、三保の松原、天の橋立、千代の松原、生の松原等なるが、一度虹の松原を見しものは、前者の松の葉色の、はえなきを知るなるべし。

鐵道馬車は、虹の松原を貫きて、濱崎の驛端に至りて止む、是より馬車を下り、行くこと凡十町餘にして、玉島の里に至れば、小丘上に社殿あり。神功皇后を祠る。下に淸流あり、即ち玉島川なり、水明にして砂白く、細鱗潑剌として波間に躍る、其大小長短歷々算すべし。神后垂綸の遺跡は則ち此所なり、龜井道載龜谷省軒諸先生の、撰文にかゝる碑あれども之を省き、換ふるに和歌を以てせん。

垂綸石　　村田新太郎
魚釣らしゝ昔の跡は年經ても朽ちぬ石にそ尙殘りける

仝　　梅能子
たらし姫魚釣らましゝ玉島の石は幾代か經とも動かし

仝　　故鬪居士
流れ來し玉島川の淸けれは石さへ世々に名そしられけり

玉島川の雜詠　　梅能子
ひなゝから都にまさる眺めかな玉島川の春のけしきは

仝　　宮崎席史
たらし姫鮎子釣らしゝ古事は文にも殘る玉島の川

仝　　故鬪居士
尋くもむかし覺えて玉島の川の瀨毎に鮎子さはしる
玉島の川瀨の鮎の見ゆる迄光り涼しき夏の夜の月

其むかし　神后細鱗を獲て、大に悅び「めづらめづら」と宣ひしより、珍の里とも稱へしが、後松浦と轉訛し、遂に郡名となりきといふ、蓋し往昔より此地方松を以て名ありしなり、此地多く大理石を產す、故に到る處石英の眞砂にして、土地至て淸潔なり。

わらはが茅屋は此玉島川の畔にあり、田圃の間、庭前に老梅一樹、客の來るを迎ふ、觀光の諸孃宜しく駕を枉げ給ふべし、一碗の澁茶も亦渴を醫するの時あり。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

愛國婦人傳

上毛形名妻

評議員　下田歌子

上毛形名の妻は、勇猛絶倫の人なり。夫、形名、舒明天皇の九年といふ年、蝦夷征伐のため、將軍に拜せられ、出でゝ戰ひけるが、毎戰利を失ひ、遂に賊兵城壘に迫りぬ。さる程に、負け戰に勇氣衰へたる兵卒等は、右往左往に散り亂れて、また如何ともすべきやう無く、將軍形名も僅に、身をもッて遁れ歸り、單身走りて壘に入り、今はすべき手だても無ければ、今宵、暗に紛れて、何處までも落ち延びんと、專ら逃仕度に餘念も無かりき。妻はこのありさまを見て、いと心憂き事に思ひ、周章狼狽せる夫のほとりに進み出で、詞靜かに云へるやうは、君、今宵、賊軍の壘に迫り侍るまゝに、最早此所はさゝへ難しと思召し定めて、落ちさせ給はんの御心に在しますにこそ。されど、能く〱思召しかへさせ給へ。今目に餘る賊の、斯う十重二十重に壘を圍み侍るものを、よし幸ひに、壘の外までは遁れ出でたりとも、後より大軍の追ひ迫り侍らんを、いかにしてか、遁れおほせ侍るべき。敵に後を見せて、生耻をさらし侍らんよりは、たゞ潔く戰死して、芳しき名を、後の世に傳へんこそ、武士の道とは申べきにて侍らめ。况してや、君が御祖は、夙に海賊を討ち平げ給ひて、いみじき功を立てさせ給ひしに侍らずや。何はともあれ。斯く御心の亂れ給ひては、正しき御思案も出で在さじ。いでや御酒一つきこし召して、御身を休め給ひて後、又兎も角もせさせ給はんぞよき。さは侍らずや。とて兼ねて用意やしたりけん。銚子土器取り揃へ持て出でつゝ、いと笑ましげに、自ら酌に立ちけるにぞ、形名も、遂に其意に任せて、一つ二つと土器の數を重ぬるまゝに、晝の間の勞れ一時に出で來て、我れにもあらずうつ伏しに伏し、前後も知らず眠りにけり。妻はこれを見て、今ははや心安しと、先づ夫の帶べりし太刀を穿き、弓矢を取り、軍の裝ひかひ〲しくして、侍婢等を殘らず廣庭に集へ、やよや、かた〱、わらはが申す事を聞かれよ。夫も兵卒も、日毎の戰に倦み勞れて、最早勝ち誇りたる敵にむかふべき氣力も無し。さればこそ、斯く、ひし〱と圍まれたる壘より、翼無き身の何として、天翔りつゝ遁れ出づべき。同じく屍を路のちまたにさらさんとならば、武士の妻、武士の侍は、斯くこそ、死ぬるものなれと、さばへなす蝦夷に見せく、後の談りぐさにもせさせてん。義のために命惜しまじと思ふ者は、我れに續けや。兵士どもが、取り捨てたる、弓太刀戟、此所に在り。好めるものを選り持たれよ、いざ諸共に。と云ひもあへず、城壘の門八文字にさつと押し開かせ、馬に一鞭あつるよと見る間に、やッと喚いて、賊軍の中に驅り入りぬ。有り合ふ侍婢等これを見て、あれ、夫人討たすな、後れじものをと。互に勵まし勵まされつゝ、三四十人の娘子軍、一團と成りて攻め戰ふ。賊は大將を始めとして、將卒悉く打ち負け、追ひ散らされ、僅かに、壘中に逃げ入りけるなれば、今は、袋の鼠を捕ふるよりも容易し。今宵は、心のどかに打ち眠りてん。明日は、白旗をさゝげて、將軍の出でゝ降るをこそ見め。とて何の備へも無く、兜を拔ぎ、弓の弦をはづして、まどろみたる眞夜中頃、夜討よ〱と叫ぶ聲起りて、はや敵軍は込み入りぬといふに、皆惶て惑ひて、同志討に多くの味方を滅しぬ。さても壘の中には、廓外、俄かに物騷がしと、番兵の告ぐるに、驚き醒めたる將軍形名は、始めて妻の働きを知り、且耻ぢ、且悦び、殘兵を集めて、後援を成しける程に、賊はいよ〱亂れ靡きて、遂に大勝を得たりき。さて次の日、形名はまた、妻の忠告により、逃げ散りたる味方を招き寄せ、遠く驅りて、賊軍を追ひ討ちければ、賊は、再び盛りかへさんの勇氣も無く、大敗して、内地を退きけるとぞ。

我が朝古來武を以て國を建て給へる故にや、女子にして戰功をたてたる者、蓋し甚だ少なからず。就中、この形名の妻の如きは、怯懦なる夫を助け、敗軍をさめ、危險に陷りたる城壘の圍みを解かしめしのみならず。蝦夷をして、遠く内地を去らしめたるが如き、まことに、有髯の丈夫と雖も容易くなし難き所なるべし。况んや氣力沮喪せる夫に對するに、先づ、慰藉の意を表して、好める酒を勸め、さて後に、自ら死を決して、賊軍に身を投じたるが如き、優にして智あり勇あり。實に珍らしき女丈夫といふべし。されども、斯くの如きは、百千の婦人中稀に見る所の人にしてその戰功を擧ぐるが如きは、巾幗中のなべてに望むべきにあらず。されば女子は、女子の本分を盡すに心を用ふること深かるべし。其範圍に超ゆるが如きは、能く我が器を知るの明智ありて後ならでは、容易に行ふべきものとな思ひそ。

童話

子より若い親

月酒舍かつら

或處に、五十歳になる老人があります。此老人は、封建時代には、或國の殿樣のお小姓であッて、學問といッては、三字經、千字文、四書、五經の素讀に、孝經、蒙求の講義を聞いた位ですから、今でも、假名の附かない新聞は、少し解り兼ねる程ですが、武藝は兒童の時から勉强したもので、劒術は申すに及ばず、柔術、馬術、鎗術、弓術、水泳術まで、中々の達人であります。其位ですから、身躰も肥太く偶儻く、盛壯の頃は、躰量が二十二三貫目も有りました。此節は年の加減で、大分瘦せて來ましたが、それでも此程掛ッて見ましたのに、十八貫目ありました。遠路を歩行ても、疲勞るといふとは少しもないので、急ぐ用事でなければ腕車に乘るとはありません。

此老人に、二十五歳になる子息があります。此人は兒童の時から學問を勉强し、先づ小學校を卒業し、夫れから尋常中學校、高等學校、大學と順次に卒業して、學士となり、今も尚ほ、大學院に在學して、學問の蘊奧を極めて居りますので、智育と德育とは申分はありませんが、躰育は不十分であッて、身躰がひどく瘦せて、躰量も十一貫五百目しかありません。斯樣な蒲柳い身躰ですから、少し寒いめに遇ふと、直に風邪をひいたり、少し飲食物の加減が違ふと、直に腹を損じたり、少し遠路を歩行くと直に疲勞れるので、大抵腕車に乘らなければ、他所へは行かれません。

或時、此親子の人が、生命保險を申込みました。するとと會社から醫師が出張して、親子の人の力量、肺量など、躰格を檢査して歸りました。

醫師が會社に歸りますと、會社の役員が醫師に向ッて「何うでした二人とも合格てすか、」と問ひましたれば、醫師がいひますには、「老人は合格てすが、子息は駄目です。」役員は疑訝な顏をして、「保險申込書で見ると、老人は五十歳で子息は二十五歳といふ盛壯ではありませんか、」「さうです年齡はさうですが、躰格からいふと、老人は非常に丈夫な身躰で、八十歳までは大丈夫活きられますが、子息は餘程蒲柳い身躰で、さうです、マア、五十歳までむづかしいでせう。」「では、老人はまだ卅年活られて、子息は廿五年しか活られない。すると、子息より老人が五歳程年齡が若いといふ譯になりますネ」「先づそんなものです。此節はさういふ顚倒なのが折々あります。實に歎息千萬です。」

鈴木小舟女史筆

皇太孫御降誕を祝ひ奉る歌　香川縣　森　いとか子
月に日に缘そはりて茂るらむ御苑に生ふる千代の若竹

同　京都府　渡邊　豐子
大内山二葉の松の年毎におひたつ御代におふそうれしき

同　岡山縣　稻葉八千代子
年毎にいやしげりゆく吳竹のみそのゝさかえかぎりしられず

月前虫　愛知縣　角田　あや子
なくむしのこゑのひゞきに眞萩原こほるゝつゆもみゆる月かな

雨後月　岡山縣　坂田　貞子
雨たりの音はのきはに殘れとも空すゝしくもすめる月哉

風　山口縣　武光　のぶ子
しつかなるいほにしあれば松風の音にも夢をやぶらるゝ哉

同　大阪府　大高　たへ子
風あれて浪のおとたかし沖をゆく船人いかにたちさわくらむ

雲　同　石田　裕子
さま〲の姿にみゆるうき雲のゆきゝあやしき夕ぐれの空

同　愛知縣　角田　あや子
久方のそらにたゝよふうき雲のうきてのみ世を渡るべしやは

雷　同　山内　經子
なるかみのとゝろく音に幼子もひろれの夢をさましける哉

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

家政

◎家政要領

家事衛生　第二　看護（つゞき）

食物は病人の衰へて眠なき折などには最良き催眠剤なり。

病人の食事する間は靜にはべりて話などし掛けず、食事にのみ心を專らにせしむべし。病人の食物を調へんものは胃の作用をたすくる樣に心掛べし。調理を以て胃を補ふ心得なかるべからず。

病人を心もなく衰弱に陥れしむること左の諸件によること間々あり。

（い）煮方惡くして食べられざるによる。
（ろ）食物の選み方惡きによる。
（は）食事の時刻を誤まれるによる。
（に）食思と消化力なきによる。

家人のよく口にするは前の三ッならで食慾のわしきことのみなれど、決して左のみにあらず。病人に食慾なしとて過ごさて、傍より爲すべきことを爲すが病にはべるものゝつとめなり。されど又食慾なきものに食すべきことを勸むるはよけれども之を强ふるはあしゝ。

食物類を考へ見るに動物より取りしもの、大かたは植物より取りしものに比べて養となるものを多く含めり。牛の肉は最も力を附け脂なき豚の肉は其次にして兎・鹿の肉も尅化よし。鳩の肉鷄の肉もこれに劣らず。

されど肉のみにて病人を養はんとするも、いと難事なり。穀蔬のみを用ふるも亦然かなり。米と肉と適當に混ぜ合せ適宜に調理せるを最とす。我邦人に粥・䐬汁を以て病を養ひ肉氣を加ふるは然るべき仕方なり。

肉は凡そ煮れば柔くして歯切よくなれども、養となるものは液の方に入るなり。水を多くして長く煮るときは殊更然かなり。炙り又は蒸すは養もよく尅化やすし。

病人衰弱强くして肉をよく嚙む氣力なくば、細かに切り又はたゝきて與へ或は輕き野菜など加へて汁となし與ふべし。

鷄卵の生なる、はた軟に煮たるは甚輕き食物なり。卵黄のみ用ふるは殊に優れり、羹汁類に加へたるは中にもよろし。

病人に供する汁類は餘りに薄くするなかれ、食べものは食べものとし、飲みものは飲みものとして授くる方効もあり心地もよし。

肉羹汁をば榮養よきものとのみ思へるは甚き僻事なり。肉羹汁は美氣を引起て尅化を助くるものにて、他の食物に加へてこそ滋養となれ。これのみにて滋養とはならず。

乳は最と良き品なり。新に搾りたるを煮立てゝ冷し用ふるを最も可とす。但し人によりて乳を嫌ひ又は乳に堪えず、或は之によりて消化をわしくすることあり。

渴は大切なる病候にして忽にすべからず。而も飲み料の選方は難きものなり。茶・珈琲などを否むとき已むなくば精良なる井水を與ふべし。水は果の汁よりよし。時によりては之に酸水（炭酸水など）を加へ、傳染病の恐あるときには煮立てゝ用ふべし。腸加答兒・腹膜炎などには冷水は痛を增し渴を激くするがゆゑに口を嗽ぎ氷球を嚼ましむべし。

◎家計收支の實况（其二）

廣島縣蘆品郡　何某報

明治三十五年八月收支

一、家族十人但し父母子供四人（内一人は六歳の女子）下男一人下女三人、

一、一ヶ月收入は農業なればいとつまびらかならざれど凡そ四百圓位ならん。

但し銀行株券・軍事公債などの月割利子合計の上

一、支出金合計九拾六圓六十一錢

内譯

一金三圓　酒代
一金七圓六十二錢　魚肉代
一金四圓十二錢　乾物砂糖代
一金一圓二十九錢　菓子代
一金一圓五十錢　茶代
一金二圓四十錢　烟草代
一金二圓十五錢　小間物代
一金二圓二十錢　味噌・油・炭代
一金三圓三十錢　牛乳代
一金四十六錢　豆腐代
一金三圓〇五錢　新聞雜誌代
一金八圓　衛生費藥價
一金二十圓　被服料
一金三十圓　雜費
一金二圓　諸人救濟費
一金五圓五十錢　下男下女給金

右は八月中の支拂を一錢も加減せず書いたのでございます。毎月其品物によっては多少金額のちがひがございますけれど、合計の上は澤山ちがはないので御座います、それから米・薪・醬油は買入はいたしませぬ。

貯蓄の事も申上たうございますけれど、私ではよくわからず、それからまだ右の外に赤十字社・保險などの掛金や税金もあり又八月中は休暇で歸ッて居りましたが高等學校に兄が入學して居ますから、其月々の費用もありますから、貯蓄は澤山できないのでございませう。不行届の家計にて御恥しうは思ひますけれどもかく御通知申し上ます。

岩手縣盛岡市　何某報知

殘の暑さ未だきびしく候へども、御取々樣いよ〳〵御健勝の御事、大慶に存じ奉り候。さて第十一號愛國婦人に、家計收支の實况を報知せよとの事之れ有るに就いては、誠に仰せの如く地方・職業等により、種々なる差異あるを互に書いつけ報知せんには、實に面白くして參考ともなるべきことゝ存じ候。されば己が家計の如きは、田舍風とや申さん、誠に都の人々には無用らしき物の數多くて、是非店頭に求めざるべからざる物の費目の少しもなき等、誠に不注意にして皆洩しやせぬかとも思ひすらん。されどこゝにてそなか〳〵興味ある所なれ。さりながら外々の人樣に見せ參らせんこと、うらはづかしき心地の致し候へば、匿名にて御報知申上候、かしこ。

明治三十五年五月家計收支

一家族七人　但老母・夫婦・女兒四人（内長女は家事を助け、二人は高等女學校一人は尋常小學に在學中。）

一收入金四十五圓八十二錢八厘

内譯

一金二圓三拾二錢八厘　前月より越高
一金十六圓　月給
一金十三圓　預金利子
一金十四圓五十錢　家賃

一支出金四十二圓五十一錢九厘

内譯

一金十一圓二十三錢五厘　縣税戸數割追加及び市税
一金二圓三十錢　肴代
一金五十三錢七厘　鷄卵三十五個代
一金九十錢　牛乳三升代
一金三十二錢五厘　酒一升四合五勺代
一金三十六錢　醬油二升二合五勺代
一金十九錢　豆腐代
一金二錢五厘　酢二合五勺代
一金四十二錢　玄米三駄つき賃
一金一圓六十錢　二人分授業料
一金二圓八十錢　筆墨紙等
一金二圓五十八錢五厘　被服料
一金一圓九十三錢　薪代（四百三十本）
一金二圓四十錢　炭四俵代
一金三十五錢　石油二升五合代
一金四圓二十錢　垣柴代
一金一圓九十八錢　垣結人夫賃（男六人）
一金二圓〇八錢　園藝費（男六人女六人）
一金一圓〇二錢五厘　種苗代
一金一圓二十二錢七厘　交際費
一金二圓七十五錢　雜品其他雜費
一金一圓二十錢　新聞及び雜誌代

以上

差引殘金三圓三十錢九厘

右は家計簿より寫取りて報知せられたるものなるべし。費途精密にて、同地方の物の直段さへ知ることを得るは、いとおもしろし。職業の報知なきをもて、官公吏なるか、はた會社員なるか知ることを得ざれども、預金利子と家賃との收入ありて、其上に米も舂賃のみかゝげあれば、小作米などにて食料に充てらるゝものならん、安心なる家政といふべし。右費中縣税云々、垣柴代・垣結人夫・園藝費・種苗代は、いづれも毎月入用のものにあらざれば是等を月割のみ加ふる時は、實際支出は三十圓以内にて事足るならん。

野菜の費目なくして、種苗代のあるを見れば、菜園を所有せらるゝ故ならんか。

貯金の事に及ばれざれしは遺憾とする所なり。思ふに毎月家計剩餘と小作米の食料に餘りたるをば、賣拂ひて銀行に預け入れらるゝならん、其額が已に數千圓に達し、一箇月拾數圓の利子を生ずるに至りしなるべし。

編者附記

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

●正誤　前號寫眞附錄中伊達宗德夫人は宗陳夫人の誤、又陸軍少將土屋光春夫人は陸軍中將土屋光春夫人の誤なり、玆に正誤をかゝげ記者の粗漏を謝す。

宮廷録事

●御恵恤　天皇皇后兩陛下には、東京府下北鳥島噴火の慘狀を聞食され、いと憫然に思召されたる趣にて、御恵恤として去る六日金千圓を下賜せられ、また去月十日、山口縣下非常の暴風雨被害鮮からざる由聞食され、罹災者御救恤として天皇皇后兩陛下より、金一千圓御下賜相成りたりと承りぬ。

●赤十字紀念祝典行啓　赤十字社創立二十五年紀念祝典及び第十一回總會は十月二十、廿一の兩日を以て擧行することに決し　皇后陛下の御臨場を請願したるに御都合に依り二十一日行啓あらせらるゝ事に御内定相成りたりと。

●東宮殿下へ獻上の筍　鹽原妙雲寺住職何田葉賢師は此程境内の竹林に筍發生したるを珍とし十數本を掘取り皇太子殿下へ獻上を願ひ出でたるに殿下には御嘉納あらせられ　天皇陛下に進獻し奉らんとの思召にて近侍に命じ二人挽の人力車にて西那須野驛へ急がせ即時宮内省へ回送せしめられたりと。

●東宮妃御下賜　葉山御用邸に御滯在中なる皇太子妃殿下には十六日附近の各小學校男女生徒五百餘名に對し御菓子數個宛を賜はりたりと

●有栖川宮別莊御新營　有栖川宮殿下は鹽原の風景殊の外御意に適ひて地所三四千坪御買上げ別莊を御新營あらせらるゝ筈にて昨今夫々地所の御選定中なりと。

●龜山天皇木型御像　元弘紀念碑の上部に建設する龜山天皇御銅像の木型は、木彫家山崎朝雲の擔當にて、此程出來せしを以て、去る十四日、駒込千駄木町の同氏自宅に於て、美術家の觀覽に供せしよし。御像の丈は一丈五尺にして、頗る立派なる出來なりと云ふ。尙其鑄造は、鑄金家岡崎雪聲之を擔當する由。

◎愛國婦人會記事

●評議員會日割　暑中休暇にて暫く中止中の水曜日各組評議員會は、來る十月より開始せらる、其會日は左の如し。（前號所載再記）

十月　一日（第一水曜日）第二の組
同　八日（第二水曜日）第三の組
同　十五日（第三水曜日）第四の組
同　廿二日（第四水曜日）第五の組
同　廿九日（第五水曜日）第一の組

●香川縣木田郡愛國婦人會第一回總集會　香川縣木田郡に於ては本會員一團となり、木田郡婦人會を組織し、本年七月廿七日同郡平井村西德寺内に其第一回總集會を開きたり。今其槪況と規則とを得たれば之を左に掲ぐ。

先づ會長より開會の挨拶あり、次に發起人石塚木田郡長は愛國婦人會の趣旨より說起し、今や本會の開設を見るに至りたるを悅び、併せて將來會員の心得べき要件を演述し、次に來賓小野田香川縣知事は愛國婦人會は國家的事業なれば其隆盛を望むと說き、本會の盛衰は即ち愛國婦人會の隆替に關するを以て、會員が將來益す熱心に力を致さんことを希望すと說き、尙婦德に就て貞婦・烈女の實蹟談あり。次に愛國婦人會木田郡幹事石塚千賀子、會員太田たけ、植田この、槇塚いち三好すき諸子の祝詞演說あり。次に來賓醫學得業士松原國三氏の婦人衛生談、及び香川縣監獄敎誨師滿安小比賀二師の道德談ありて閉會せり。當日會員の參集せるもの六拾餘名にて、郡内村長校長有志者等亦多數臨場し頗る盛會なりき。

祝辭

夫れ國家の安危は兵力の强弱に基因す、果して然らば、わらは等今日高枕安臥煕々として太平を樂しむも、國家の干城たる陸海軍將士か孜々として吾親愛する家眷を顧みず、其職を誠忠國家に盡すの結果たらずんばあらず。夫然り而して我忠勇義烈の軍人たりと雖、父たるもの夫たるもの決死の時に臨んでは、誰か後に顧るの憂なからん。然りと雖、君を思ひ國に盡すの切なるより、忠勇義烈の一死を甘んじたるを察すれば、數ならぬわらは等婦人といへども、愛國の微衷を致し之が軍人の奬勵を謀ずるは、苟も文明國婦人たるもの務むべき義務と謂つべし、是れ即ち愛國婦人會の起る所以なり。是に於て本邦教育家は率先して愛國婦人會の趣旨を翼賛せられ、本郡婦人會を組織せられ、本日を以て之が發會の式を擧ぐるに當り、苟くも知事公閣下其他有志諸氏の御臨場を賜はり、本會の光榮何を以て之に如かん。聊か蕪辭を陳べ以て本日の祝辭とす。

明治三十五年七月廿七日

愛國婦人會香川支部地方幹事　石塚千賀子

謹て惟ろに國土の文明は政治の善きに關係し、政治の善きは家法の善なるに關係す、而して家法の善なるは婦人の心深く智識進み操の正しきによれり。吾國古より今日に至る迄善行を遂げし婦人亦多しと雖、我國土全躰より之を觀れば婦人の敎養法未た十分と謂ひ難し。今や文明の化漸く山邊に迄侵入し來り、其道に熱心なる奥村五百子女史の發起にかゝり、多くの貴婦人方の御賛成を得て、設け出されたる愛國婦人會の成立するや、當木田郡に於ても早くも其趣旨を翼賛し、之を機會として尙郡内婦人の德義節操及び慈善心を發達せしめんの目的を以て、木田郡婦人會を組織せられ、本日を期して總集會を開設するに方り、知事公閣下を始め名譽ある諸公の御臨場を辱ふし、わらは如き數ならぬ身すら、其席末に列するを得たるは、實に本會の光榮のみか、大にしては國家のため賀すべき至り也。是れ全く當郡長以下發起諸氏の厚き御導きによるものと、會員一同の喜び之に過ぎたるはなし、つらつら考ふるに、女子は如何なる戰時に逢ふも戰役に臨む能はず、直接以て國家につくすの方便なし、故に今回の如き婦人會に加はり、普く軍人の爲に心安く戰役に從事するを得るに至らしめ、間接以て國家に盡さゞるべからず。願はくば會員擧りて奥村女史の「半衿一かけの用を節する」の名言を服膺し、一致協力以て當會の隆盛ならんことをひたすら祈るになん。聊か愚言を述べて本日の祝詞にかふ。

明治三十五年七月廿七日

香川縣木田郡内中村婦人會員　植田　この

國の爲にと忠勇義烈なる軍人が妻子に別れ親を置き、身は鴻毛と覺悟して、雨なす彈丸のもとに身を抛ち、水なす刀の下に身を伏して名譽の戰死を遂げ、或は瘴癘の氣に觸るゝもの果して幾許ぞや、殊に憫むべき生計困難なる軍人たちの遺族救助の道賑恤の法を講じ、是等軍人たちに後顧の憂なからしむるは目下の急務ならずや。爰に奥村五百子刀自齡耳順の身を以て、國を憂ふる鋭意暫くも止むなく、燃ゆるが如き熱誠を以て奮然起ちて海を渡り異域の地を踐み、親しく戰地の實況と軍隊の勞苦とを視察し、歸るに及び身を忘れて是等悲慘のために盡せり。玆に同志のともから愛國婦人會なるものを設立し、普く有志の諸媛を糾合して、女史の希望を助けんとするに當り、畏くも各妃殿下の御賛同を給ひ、益に救援の道を盛させたまへり。本郡に於ても亦其趣旨を翼賛して、愛國心を養成し兼て婦人の德義節操及び慈善心を發達せしむる目的を以て、木田郡婦人會を開設せられ、本日玆に盛大なる發會式を擧行せられ、知事閣下を始め數多の紳士貴婦人の臨場を辱くせり、わらは等の悅び何事か之に如かん、今かくも隆盛なる此式に當り、本會の益す榮えんことを。聊か蕪辭を述べて本日の祝言に代ふるになん。

月治三十五年七月廿七日

木田郡富元村婦人會員　槇塚　いち

木田郡婦人會規則

第一條　當會は木田郡婦人會と稱す

第二條　當會は愛國婦人會香川支部會員を以て組織す
　但男女を問はず若干の名譽會員を置くものとす

第三條　當會は愛國婦人會の旨趣を翼贊し尙婦人の德義節操及慈善心を發達せしむるを以て目的とす

第四條　當會に左の役員を置き其任期は滿一ヶ年とす
　幹事長　一名
　幹事　若干名

第五條　幹事は愛國婦人會香川支部木田郡出身幹事を以て之に充て幹事長は幹事の互選を以て之を定む

第六條　當會は毎年春季一度總集會を開き左の事項を擧行するものとす
　一　庶務會計の報告
　二　役員の改選
　三　決議談話等

第七條　當會は春夏秋冬適宜に日を定め通常會を開き學識德望を有するものを聘して講話を求むるものとす

第八條　名譽會員は幹事長より之を推選するものとす

第九條　當會に入會せんと欲するものは其住所氏名職業を記し幹事長に申込むべし

第十條　會員は會費として一ヶ年金壹圓貳拾錢納付すべきものとす但し都合に依り毎月金拾錢を納付するも妨げなし

第十一條　當會は前條の納付金より會員一名に付會費として一ヶ年金壹圓を愛國婦人會香川支部へ送納し殘金を以て當會の費用に充つるものとす

第十二條　役員より入會するもの、會費は毎月廿五日限り（月俸領收の際其校に於て取纏め）會計幹事へ送附するものとす

第十三條　會員より會費送付ありし時は會計幹事は領收證を交付し現金は銀行へ預け入れ置くものとす

第十四條　本則實施に要する細則は役員に於て別に定むるものとす

秋のはじめに　評議員子爵夫人　本多延子

秋風にのこる暑さもうすらきて
　ふしよきほとに夜はなりにけり

初秋蟲　同

さま〴〵のむしの鳴音にはつ秋の
　あはれはいとゝまさりぬるかな

萩初綻　同

秋立ちししるしともみむ我やとの
　萩のはつ花ほころひにけり

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

◎婦人論梗概

◎棚橋絢子女史の「母親の心得」　女子が初等教育を終れば其校長其教師ある女學校に入學せしむべし。現今の女學校程度は甚だ高尚なるものにあらず、一般卑近の普通學を教ふるものなれば、相當の地位ある人の妻とならむには、成るべく之に入學するを良しとす。然れども女子に何等の故障なきに、獨立の生活をなさしめむとの意を以て、入校せしむる父兄の如きは不心得の甚しきものと云ふべし。凡そ男子は娶り、女子は嫁せざるべからざる也。男子に在ては學藝又は事業の爲に獨身生活を營むの異例なきにしもあらざれども、女子は斯る場合なしと斷言せらるべし。勿論早く良人に別れて再嫁するに忍びず、或は遺子を養育せざるべからざるなどの場合に於ける獨身生活は、人事の變に臨みて寧ろ貞婦賢母として身を處するの道にして、世の鰥佛なる教育家が嘵々する獨立生活とは大に異るものなり。世の父兄たるもの、女子は必ず嫁せざるべからざる事を念頭におきて、之を監視し之を教育すべき也。適し舅姑に奉して孝に、夫に仕へては貞淑に、叔妹に對しては仁慈なるは、女子の沢慣にして其天職を盡すものと云ふべく、決して男女同權を唱ふる偽教育家の所謂卑屈卑怯なといふべきものにあらず。個人として男女に尊卑の別なしと雖、夫婦なる關係を生じたる以上は、尊卑の關係を生ぜざるを得ず。既に躰格を異にし、業務の度合、種類を異にする以上は、男女同權と云ふは斷じて妄なり。世の女子たるもの彼等の妄言に迷はされて、婦道を盡すを卑屈と考ふる如き僻見を廢絶すべき也。さて初等教育卒業後の女兒をして良妻賢母たらしめんとせば、家庭に於て如何に注意すべきか、小學校時代の注意は尚繼續して行ふべきは勿論にして、年齢の增加と共に多少異る點あり。此時代に於て父母殊に母の躬行して模範を垂れ、能く訓戒すべきは家政に慣れしむるを最也。家政は實行的のものにして空理空論のものにあらず、其要は一家の經濟と傭婢の使用等に在り。經濟の要は其使用物品より其最大の効果を得るに在り。而して衣食住の三要品の中、最切要にして通常消費額の巨大なるは食物なれば、一家の經濟は重に流し元に在りといふも不可なし。故に食料の購入、使用の注意は最重大にして其効を十分ならしめ、兼て家庭の和樂を來すべき割烹の事は最も注意して其技を習はしめざるべからず。次に裁縫は女子第一の技藝なり、之を習熟せざる女子は他に如何なる知識技藝ありとも、完全なる女子といふべからず。裁縫は別に之を職業とするものあれば、高等の教育を受け或は上流の家に嫁たるべき女子は、之を棄てゝ他の學藝を研くべしといふものあれども、之は輕薄なる妄論なり。其他器具物品衣服等を整頓し、順序正しく始末する習慣をつけ、又日常の金錢出入を嚴密に記すは最必要のことにて、其習慣を養はざれば濫濟に流れて行ひ難きものなり。座敷應接の間の裝飾品の配置等は、無趣味野卑ならざる樣注意せしむべし。衣服装飾等流行を追うて新奇を貴ぶべからず、常に質素にして趣味あるを要す。又實用に適すればとて、直に日常の衣服とするは好ましからず。かの女學生の袴の如きも家庭に常用するは如何はしく思はるゝ也。況や中年老年の婦人の用ゐるをや。元來衣と住とは密接の關係あれば、住居の躰裁を變ぜずして衣服のみを變ずれば、其不都合不體なると實に豫想外なるものあり。云々（女鑑、本論未完）

◎鳩山春子女史の「洋行中の所感」　日本人は音樂又は遊戯の如き淡白なる事を歡ふ習慣乏しき樣てに、不知不識下品なる樂を求めんとする傾向なり。西洋にては然らず、即ち男女共に音樂思想なきは殆と無き位なり。故に一日の業を終り晩餐後一家の老幼共に唱歌抔を謠つて樂めば、自然に子女の感情を高尚にし道德を養成するに足るなり。又主婦が其業務に從事する間、往々小聲にて愉快さうに唱歌し居る事あり、此の如くにして始て一家內に愉快なる空氣を漲し得べし。又日本にては母親に重きをおかざれども、西洋にて母親を尊敬する事は實に驚くばかり也。即ち一家の法律は母親之を作りて執行するものにして、兒童の惡戯甚しき時は夕飯を與へずして寢室に入れおくとあり。又兒童が物を貰ひたる場合には、先づ母親の處に持行き、母は其受くべきものならざる時は決して之を受けしめず、一歩も假すことなしと雖、兒童が切に其物を欲して號泣するとあらんか、力めて兒童の氣を轉ずる樣に種々可愛がり、決して其非を責くとをなさしめず。故に兒童は母親の裁判には爭ふと能はずと雖ども快く服從するなり。併し母も亦大概は或一定の規律を立て、嚴格に之を實行さするに代りに其以外には餘り干涉せざる也。又暇あれば兒童と同じ氣分となりて共に遊ぶなり、決して吾國の母親の如く座つて居て、何かあれば小言を云ふ如き事なき也。又玩具も子供の知識を開發すべき物を選擇す。食事は隨分成人する迄別にす、そは幼年者の食事時間は規則正しくせざるべからず、然るに父母は來客其他交際の爲に其時を守る能はざるに由る也。要するに西洋に於ける一家の主婦は、兒童に對して裁判權も行政權も有するを以て、自然夫に讓座する道德と知識とを具へざるべからざるも、習慣上幼時より見聞する處によりて、容易に而もよく其務を盡すが如し。云々

（大日本婦人教育會雜誌）

◎善行彙報

●老婢賞を受く　麴町區永田町二丁目五十四番地丸山正彥氏方の雇人田邊とき女(六十)は、先代伸樂翁に雇はれ爾來二十五六年間勤續し、今尙同家に在りて朝夕の雜役に服しつゝあるが、過日千家東京府知事より左の褒賞を受けたり。

神奈川縣橘樹郡高津村　田邊とき

夫龍觀の病氣に罹るや、身を忘れて療養看護に從事し、誠心獻身して至らざる處なし。其終に起たざるに至りて、家産爲めに傾倒す。然れども辛苦幹理能く兒女を養育し、尙資産の回復に志し、家事を長子に委し、已れは出てゝ丸山家に雇はれ、不幸長子放縱度なくして、一家復離散するに至る。茲に於て孫兒金太郎の倚る處なきを愍み、破履の身を以て之を保育し、飢寒を免れしむ。其傭主に事ふるや、能く身心を竭し、勞伏溜浣を始め、朝夕一切の雜役に服して、毫も倦色なく忠勤怠らざること、多年一日の如し。洵に奇特とす、仍て爲其賞金二圓を下賜す。

明治卅五年八月廿五日　東京府知事男爵　千家尊福

●米國婦人の慈悲　去にし十二日午後三時頃、麴町飯田町二の五十九番地先に、病衰えたる老婆行顚み、巡査部長認めて介抱し區役所へ引渡さんと、其の姓名を問へば白倉カネ(七十四)とて曾て宇三郎といふ悴あり。神田鍋町四番地に住し飢えす凍えす暮したるか、三年前宇三郎病死し其後は倚る力もなく、人の門に立ちて露命を繋ぎ居たるに、此程病氣を發し前記の如く行顚み居りしと、物語る所に、米國陸軍少佐オー、イー、ウツド氏の夫人馬車にて通懸り憫れを催し馬車を下りて種々同慰めたる上、金一圓二十錢を惠みたるが、カネは區役所の手を經て養育院に送られたり。

雜報

●日本女子大學の近況　同校には從來校內に八家族の寮舍三棟と、校外に二家族の寮舍二棟ありし所、今學期より樺山伯の好意によりて、同伯邸內に二家族の寮舍二棟を設け、樺山寮と名けて七十餘名の生徒を收容し、寺田男爵氏の邸內に森村市左衛門氏の好意によりて、三家族の寮舍一棟を建て曉明寮と稱し七十餘名の生徒を收容し、之にて都合大凡全生徒の半數、即四百名の生徒を收容するとゝなし、自宅以外より通學する者、止を得ざる事情のものゝ外、悉く入寮せしめ、嚴重に監督保護することゝなりたる由。

●獨逸の女子大學生　從來男子の專有たりし各事業中、先つ高等教育に女子を容るゝの問題は、今日既に一の日程となれり、此之に關して「ストラスブルグ」の大學は必要の主旨を決定せり、此の大學の評議會は各教官をして其の講義を女子に聽かしむることを許し、條件を設けて左の二種に制限せり。

第一　成熟證書又は獨逸の小學女教員證書を有する獨逸女子又は外國女子

第二　同等と認めたる證書に依り外國の大學に入學を許されたる獨逸女子

女子學生の聽講を許されたる學科につき將來の制限、即ち「ドクトル」試驗、又は政府試驗に就ては未だ何等の問題なし、女子が漸次大學に入るの結果は左の數に依りて明なり。

普國大學の女子學生數

千八百九十五年至九十六年	百十七人
千八百九十八年至九十九年	四百十四人
千八百九十九年至千九百年	六百六十四人

而して女子を許して大學の講義を聽かしむるにつき、今日まで不虞の弊害障害等の害も發生せしことなきは、十分に保證する所なり。

●留學の支那女學生　曾汝錦(上海人)陳彥安(同上)華桂(無錫人)胡彬(同上)錢豐(浙江人)の五名が我國に留學せし事は過日報じたる處なるが今回又新らたに方拜(福建人)玉崑(湖北人)の二名留學何れも下田歌子女史の許に寄宿せり彼等支那女學生は食物も他一般の女學生と異なる所なく衣服も普通の單衣に袴を着け髮も束髮なれば一見毫も支那人とは思はれず年は十二三歲より廿三四歲に至るものなりと。

●貴女の空中旅行家　澳太利亞のフヰンチ夫人は、輕氣球を飛ばせて、セントクラウトより百六十哩を隔てたるコンデサアキル迄、五時四十五分間に到着したれば、佛國の空中旅行俱樂部は、同夫人に賞盃を送りたるが、此一事を見ても、外國夫人の冒險思想に富む一斑を知るべし。

●無線電信發明者マルコニの母　無線電信の發明家マルコニ氏の成功は、其母の力多きに居るといふ。母は愛蘭の有名なるホウイスキー釀造者、ジェームソンの娘にして頗る美人なり。幼年の頃、金錢の力にて能ふ限りの教育を授けられ、尙十分に音樂を學ばしめんとて、伊太利に送られたり。同地にてマルコニの父と懇意となり、終に結婚してマルコニを生むに至れり。爾來一意マルコニの教育に努め、何處に至るも彼を伴はざるなく、マルコニが化學・電氣學等に興味深きを見て、自此等の科學に關する、有らゆる器械・雜誌等を求め、彼に與へて奬勵し、之がためには毫も時と金とを惜まざりき。母子の關係は、同情と眞正なる愛情との結合にして、曩に母に伴はれたるマルコニは、今や到る處常に母を伴ひつゝある由なり。

●一婦六十二人の子　伊太利ナーブルズ府を距ること十二哩なる、ノセラと稱する一小市に、其名をマッツタレナ、ダラナナと呼べる婦人あり。本年五十七歲にして、今より十年前に夫に別れたるが、其一緒に連れ添ひし十九年の間に、男の子供五十九人、女の子供三人、都合六十二人の子供を產みたる由、さりとは盛なることなるが、今如何にして僅か十九年の間に、斯く多數の子供を產みたるやと云ふに、十九年間に三ッ子を產むこと十一度にて三十三人、四ッ子を產むこと三度にて十二人、五ッ子を產むこと一度にて五人といふ工合に產みたるなりと云ふ。餘りに珍らしき母親なりとて、年金を與ふことにしては如何との議、伊太利人間に起り居れる由。

●將軍の妻は誰ぞ　南亞戰爭に大勝を得て、近頃英國に歸りたるキッチェネル將軍は陸軍大將に任ぜられ、軍人としての名譽は殆ど受けつくしゝが、今に未婚なるため其妻たらんと欲する令孃頗る多く、その運動なか〳〵激烈にして、英國の一新聞は記して曰く、南亞に於て三年の苦戰を經、敵軍の重圍を脫して僅に戰場を離れたる同將軍は、今や孃子軍の重圍に陷りて、再び苦戰せざるを得ざるに至れりと。

●小兒の國王觀　倫敦なる某商店の前に佇立して店頭に陳列しある見事なる色刷の英國皇帝陛下の肖像に見取れし二人の小女あり、暫くすると一人の小女は他の小女に向ひ、あれは誰れの肖像なりや、知つて居てと尋れたり、尋ねられたる小女は、あれは皇帝陛下の肖像なりと答へたるに、最初の小女は更に皇帝の何者なるやを知らざるものゝ如く、更に問を發して、皇帝とは何だらうと問ひたり、一人の小女は皇帝の事なりと答ふる外、爲すべき術を知らざりしが、初めの小女は今一層問を進めて、皇帝樣は幸福な人だらうか、一體何をして生活をして居るのと問ひたるに、一人の小女は如何にも其無識に呆れたらん如き顏して「皇帝樣は自分の肖像を刷り出した郵便切手を賣つて居らつしやるの」

●英佛獨の婦人氣質　歐洲大陸の或る旅館の會食室に於て或る日獨逸の一貴婦人は給仕人に向ひ其窓を閉ぢよ然らざれば我は死すべしと告げたるに英國の一貴婦人は否其窓を閉づるなかれ若し其窓を閉づることあらば我は氣絶すべしと云へり此時一佛人は給仕人よ獨逸婦人の死するまで其窓を開き置き次て英國婦人の氣絶するまで之を閉ぢよ然る後吾等は思ひの儘になすを得べしと落付て述べたる由なり。

●白耳義皇后崩御　白耳義皇后陛下マリー、ヘンリエットはスパ(同國著名の温泉場)に於て御食事中、突然心臟麻痺に依りて崩御ありたり。御悼はしき限りにこそ。當時皇族は御一方も其場に居合さゞりきと。同陛下は一千八百三十六年八月二十三日の誕生にて本年六十七歲に渡らせられ、千八百五十三年八月二十二日現皇帝レオポール第二世陛下と大婚の禮を擧げさせられたる方なり、墺太利洪牙利國現皇帝の皇祖父の御兄弟の皇女に當らせらる。

◎『家計收支の實況』を書いつけて報知せられんとを、我が敬愛する讀者の君だちに希ふ。

○各地の方々よりの報知に由り、種々なる家計收支の實況を、此誌上にて見給はゞ、互に齊家の參考となるべきと尠なからざるべし。

○殊に土地に由り、職業に由り、身分に由り、費目にも金額にも著き相違ありて、興味多かるべし。或は家計の帳面を、一月分だけ其まゝ寫して送りおこせ給ひても宜し。

○名前を出すとを厭ひ給はゞ、匿名にても宜し、されども、府縣市郡職業だけは知せ給へ。

○左に其一例を揭ぐ。

東京市牛込區何町會員某子報知

明治三十五年七月分家計收支

一家族六人　但し老母・夫・婦・子供二人・(內一人は學齡兒一人は哺乳兒)下女一人

一收入金五拾七圓參拾五錢

內譯　金五拾圓　月給　金七圓參拾五錢　所有軍事公債證書額面千八百圓の月割利子

一支出金四拾八圓八拾錢

內譯　金八圓(家賃)金拾圓(米代)金四圓(酒屋拂但し薪炭油醬味噌味淋共)金參圓(八百屋但し乾物共)金參圓(魚鳥獸肉代)金五圓(良人小使)金壹圓(母小使)金壹圓(主婦小使)金壹圓(子供小使)金貳圓(下女給金)金四圓(被服費月割)金壹圓(學齡兒學費)金七拾錢(新聞雜誌代)金壹圓(湯錢)金六拾錢(茶)金五拾錢(砂糖)金壹圓(衛生費)金貳圓(臨時費)

差引八圓五拾五錢剩餘

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

本誌愛讀の君達に告ぐ

こたび事務員を增し、發送の事を入念に取扱はしめ候事に致し候。此段一寸披露に及び候。

本誌代價未濟の方々は御手數ながら御送金いたゞきたく候。

尙初號に廣告致候通り本誌定價は一部につき金三錢五厘に候へども會員方に限り郵送料共金三錢にて差出し候に付相成るべく半ヶ年分(金三十六錢)又は一ヶ年分(金七十二錢)取纏め御送金下されたく度候

明治三十五年九月十日

愛國婦人發行所

婦人必讀の週刊新聞!!! 夫人令孃の好伴侶!!!

婦女新聞

毎週 月曜

婦女新聞は明治三十三年五月十日皇太子殿下御慶事の紀念として第一號を發行し爾後毎週日を誤りたるとなし

(定價)一部金三錢▲一ヶ月十二錢▲三ヶ月三十七錢▲半年七十二錢▲全國無郵税

發行所 東京市牛込區東五軒町四一 (電話番町一三〇六) 婦女新聞社

家庭割烹講義録

第一、二、三卷既刊

家庭に於ける食物改良を謀らんため、家庭割烹實習會を設立し會員を募集し講義録を發行す、これによれば六ヶ月にして居ながら家庭に用ゐ和洋調理の法に通し、一は家事經濟に一は家事衞生にかなひ以て家庭團欒の興味を豊かになすを得べし正科及科外講師は左の諸先生とす

▲日本割烹 女子共立職業學校及大日本婦人教育會割烹教師 井上善兵衞 ▲西洋割烹 外務大臣官邸庖厨主任 宇野彌太郎 ▲治庖會講師 赤堀峯翁 ▲女子大學及女子美術學校割烹教師 赤堀峯吉

其他博士學士及斯道に知名の諸家が内外飮食及其禮式等にわたり特に本會の爲めの講演を載錄す▲質疑應答▲特別通信教授等の便あれば直に講師を聘して實習を試むるに異なるとなし▲本書は非賣品なれど見本として望まるゝ向は一卷に限り三拾二錢郵劵代用一割增(一錢五厘切手)又規則入用の向は郵劵貳錢送附あるべし

東京神田區佐久間町四丁目拾六番地 電話本局二六四九

家庭割烹實習會

帝國貯蓄銀行

銀座一丁目河岸通り 電話新橋八一六番

本鄕支店 本郷一丁目
飯倉支店 飯倉四ッ辻
赤坂支店 赤坂表一丁目
四谷支店 四谷大通り
品川支店 南品川一丁目
横濱支店 横濱吉田町
神樂坂支店 牛込神樂坂
須田町支店 神田須田町
米澤町支店 兩國米澤町
吾妻橋支店 淺草雷門前
代理店 田中銀行 日本橋坂本町

●一錢以上何程にても御預り最も御便利に取扱申候
●毎月五日迄の御預け金は全月分の利子を付け申候

水原産科婦人科病院

○所在神田區猿樂町十二番地(電話本局千八百〇九番)○外來診察午前中○入院往診隨時○同院に私立産婆學校の設置あり

本舗 東京日本橋區横山町十三番 佐野大和堂

御半ゑり帯揚類

新柄友僊絞り形縫

絽○絹縮○紋鹽瀨○染形○帯片側○組絞り兵兒帯○裾模樣け出し○別織染下メ○絽手網○絞り美人

紐絣 新染 浴衣地 木綿縮眞岡小紋中形染意氣高尙向○雀形ゑり治形まげ入

電話新橋二千二十七番

新橋竹川町十二番地本店
新橋詰帝國博品館内支店

ゑり治 園田商店

大日本女學會

總裁小松大宮妃殿下副總裁鍋島侯爵夫人

推戴贊成員有栖川大妃殿下小松若宮妃殿下梨本宮妃殿下其他贊成貴婦人百餘名

新學年を開き會員を募集す

●本會は明治二十八年の創立にて既に學年を改むること三回講習終了者一萬六千餘人を出せり●講義を囑托せる講師は華族女學校女子高等師範學校日本女子大學校等の諸教授及び其他博士學士等著名の專門家なり

本會は國家開明の本源たる女子敎育の普及發達を圖らんが爲に女子必須の諸學科を揭げたる講義錄を發行し家庭を離れ難き女子をして居ながら通信敎授を受けしめ且つ家庭を整ふる人の參考に資す仍て一般女子素養の程度に應じ高等簡易兩科を設くると左の如し

高等科(毎月一回廿五日女學講義發行二個年終了東脩四拾錢月謝四拾錢紙數菊判參百頁)

○倫理坪内雄藏○禮法佐方鎭子○教育學安井哲子○兒童學高島平三郎○國文坂正臣○文法今泉定介○作文同○作歌大口鯛二○美辭學島村瀧太郎○漢文士屋弘○日本歷史大森金五郎○日本婦人列傳下田歌子○萬國歷史喜田貞吉○日本地理同○萬國地理同○地文脇水鐵五郎○理化同○算術上野清○植物松村任三○生理衞生三宅秀○家事衞生同○小兒衞生三島通良○家事經濟後閑菊野○家庭教育三輪田眞佐子○割烹石井泰次郎○裁縫渡邊辰五郎○習字坂正臣○繪畫武村千佐子○圖案同○美學島村瀧太郎○音樂東儀季治○挿花秀島成忠○點茶松浦伯爵○園藝池田伴親○法制經濟岡戸諒介○民法鳩山和夫○社會學岸本能武太○御伽譚○詞藻○質問應答○雜錄○雜報

簡易科(毎月一回五日女學講義發行一個年終了東脩貳拾錢月謝貳拾錢紙數同百五十頁)

○修身談本會編纂○禮法佐方鎭子○國文同○作文今泉定介○漢文士屋弘○日本歷史大森金五郎○日本地理喜田貞吉○算術上野伊志子○博物小此木忠七郎○理化脇水鐵五郎○生理衞生三宅秀○家事綱要後閑菊野○家庭教育三輪田眞佐子○割烹石井泰次郎○裁縫渡邊辰五郎○習字坂正臣○圖畫武村千佐子○史傳下田歌子○御伽譚○詞藻○質問應答○雜錄○雜報

●會則は端書にて請求あり次第送呈す●東脩月謝を添へ申込あれば假入會を許し直に送本すべし

昨年十一月新學年開始 十卷迄發行 初卷より缺本なし

東京麴町下二番町三七(電話番町參〇)

大日本女學會

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

明治三十五年九月廿五日發行（每月十日廿五日二回）
明治三十五年三月廿七日第三種郵便物認可

◎特約販賣店

◎東京堂　神田區表神保町三番地

◎東海堂　京橋區[illegible]四丁目

關根正直先生著

十六夜日記
庭のをしへ
諺解

『十六夜日記』は誰も知る所『庭の訓』は女子の心得を美文にて書けるもの十六夜と對照して阿佛尼の志操を見るべし『十六夜』の註は多けれど皆粗略にして精しからず庭の訓に至ては世間詳註なし先生の著はありふれたる書と違ひ詳細深切到らざる所なし諺解とは先生謙遜の命名にして實は詳解と云を憚らず

和裝美製全一冊
定價金參拾錢
郵稅六錢

發行所　東京日本橋通三丁目　六合館　電話本局五百卅一番

◉兒童新聞は日本唯一の教育的兒童の讀物なり

每月三回五ノ日發行
定價▲一部一錢五厘▲十部十五錢▲廿部三十錢▲卅部四十五錢▲五十部七十五錢全國無遞送料（凡テ前金）見本ハ往復端書ニテ照會アレ

子を持たる、父兄諸君は、御愛兒のために本紙を購ひたまへ讀ませて喜ばせる斗りでなく、教育上の參考となります

特色
◉言文がごく平易で、𠀋尋常科三年生以上のものであれば、よく讀み、よく解することができる◉野卑な記事わ全くさけ、て教育的に出來てゐる◉あらゆる科學をごくわかり安く、ごくおもしろくかき兒童の智識を啓發する◉多く四號活字をつかつて兒童の衞生に意を用ひてある◉挿繪はすべて記事と連絡あるものを用ひ、ことに意匠に意を用ひて、兒童の趣味を養ふ◉學校教育との連絡に意を用ひ學校で學びしことを自在に應用せしむ◉特に言葉づかひに意を用ひ國語統一の大機關を以て任じてゐる。

發行所　東京本鄉區本鄉五丁目二十二番地　兒童新聞社　電話局八百四番

東京高等師範學校訓導鈴木寅市郎君編
同校附屬小學校尋常第四學年生徒合作

ろびんそんくるーそー

全一册　第五編出來　定價各金拾五錢　郵稅各金四錢

本書は生徒が修身として聽きたる事柄を綴方の時に綴りたるもの數十の挿畫も生徒の意匠に成れり實に該校生徒の好成績品にして少年の好讀物なり

發行所　東京市本鄉區森川町一番地　育成社　電話本局一一四一四

ヴワイヲレツト製
壽美容おしろい
伊藤壺室吉製

正價　大瓶二十錢　小瓶十二錢
定價　大瓶廿五錢　中瓶十五錢　小瓶十錢

西洋色白くなる洗劑
壽美容あらひ粉
東兩國　伊勢吉　壽美容堂
定價綠藍紅彩蝶番ひ鏡許六錢五厘ホツクス入三錢袋入壹錢

正四位勳三等醫學博士三宅秀生先著

家事衞生

此書は文部省學校衞生顧問內務省中央衞生會委員元醫科大學部長なる三宅博士が文部省の囑托により講義されたるものなり。書中に衣服·食物·住居·育兒·看病の五篇ありて、我國一般の民度に應じ、何れの家にても實行に差支なき樣懇切に說示されたる、世に類なき家庭主宰者の寶典なり。

總クロース綴ち金文字入り
紙數菊判二百四十餘頁
定價金六拾錢　郵稅金六錢
本會々員に限り特に郵稅共金四拾八錢とす

田邊和氣子刀自遺稿

此書は故田邊女史の令名を不朽に傳へんとて本會より紀念の爲發行したる者にて、書中割烹·點茶·活花の三篇を收む。是等の科目を說きたる書世に多かれども、之を讀みて實際に講習し得らるゝものは此書のみなりとの世評あり。是れ畢竟女史が京都高等女學校·華族女學校·東京女學館および本會等に於て多年授業法に熟練せられたりし結果なるべし。なほ附錄として女史が歌·文數十篇をも載す。

總クロース綴ち金文字入り
紙數菊判五百四十頁
定價金壹圓　郵稅金拾貳錢

發行所　東京麴町區下二番町三十七　大日本女學會

青年界	婦人界	教育界	軍事界	文藝界
三號	三號	十一號	五號	八號
九月一日發行	九月一日發行	九月三日發行	九月五日發行	九月十五日發行
定價金貳拾錢	定價金貳拾錢	定價金貳拾錢	定價金貳拾錢	定價金參拾錢
郵稅金貳錢	郵稅金貳錢	郵稅金貳錢	郵稅金貳錢	郵稅貳錢五厘

東京本町　株式書籍會社金港堂　各府縣に特約販賣店あり

愛國婦人廣告取扱

神田區千代田町　博報堂　電話本局一四四四番
京橋區尾張町　弘報堂　電話新橋八五一番
京橋區八丁堀中町　一星社

總裁小松大宮妃殿下　副總裁鍋島侯爵令夫人
大日本女子會發行　東京麴町區下二番町三

第二卷第九號發兌

每月一回十五日發行定價金拾五錢全國無遞送料

《卷首》本會贊成員中山幸子筆、新選百人一首歌かるた《論說》婦人修德論、故西村博士●英國の家庭教育（承前）下田歌子《學藝》和書解題（水鏡）喜田文學士●漢書解題（三國志·晉書其他五書）丸井文學士●兒童の言語（四）梅澤和軒●明治維新の原動力（七）津田黃昏●作文批評、今泉定介●作歌批評、大口鯛二《齋家》點茶、松浦伯爵●割烹、石井泰次郎《世務》經濟談（會社）伊藤秋南●各地產業の實況（二十四）「長良川の鵜飼」伊奈かく子《譚艸》義理ある子（中·下）岸本柳子●雲雀の雛（下）大塚素江《詞藻》書讀作例一斑大口鯛二●田邊和氣子日記●みやび會員詞藻《雜錄》刺繡（承前）木村仲子●眞珠の話、中村綠水●婦人論梗概●家計收支の實況《彙報》內外要報十數件

大賣捌　●東京堂　●東海堂　●有斐閣　●北隆館

發行兼印刷人　山澤俊夫
編輯人　手島益雄
發行所　大日本女學會

印刷所　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場